

# 私の出会った人

(その12)

関谷啓子

彼女とは4回目の面談である。

小柄な上品なおばあさん。いつも白髪に似合うシックな服装でゆっくりと噛みしめるように話される。

80歳後半かと思われる。

今日は外は暖かいの？ここは一年中温度調節がされるから暑いとか寒いとかがないのですよ。

四季のある国に生まれて育ったのにね。妙な心持ですよ。

私ね、外出が好きなのにここにきてからは自由に外にも出られないの。

私には母と妹がいてね、バラバラに暮らしています。妹はだいぶボケてきているらしい。でも私も同じようなものだと思うけどね。母や妹にも会いたいのにな外出できないし……。

(唐突に)

私、犬が好きなの。いろんな犬をずっと飼っていたの。

犬は人の気持ちが分かると思うの。あなた、そう思わない？

ここにも一緒に連れてきたかったのだけれど、自分だけでなく犬まで他人に世話してもらうのは……と思って諦めました。

犬を飼ってきて一番辛いのは先に亡くなることよね。長い間忘れられずに辛かったわ。

でもあんなに辛いということは、私が犬に甘えていたということなのかしらね。

(長い沈黙)

私はね、死ぬ前に自分が知っていることは全て他人に教えておきたいの。誰にでもね。だから友達が多いと思うの。

ここにいたら誰も来ないし、一人でポツンと寂しいですよ。つまらないでしょう。

だから、こんな風になんでもざっくばらんに話せるあなたが来てくれて嬉しいわ。ずっと来てね。

ええっ、もう帰るの？忙しいのね。また来てね。待っています。

\*今日の一番の変化は、退室を告げた私に「今日はもう帰るの？」と言われた事だ。

少しずつ、彼女の気持ちの中で私の訪問が定着してきているのならば嬉しい事だ。

飼っていた犬の死について「あんなに辛いのはその分自分が犬に甘えていたのだろうか」と自問され、しばらくの間、考え込まれた姿も印象的であった。

繰り返される「私には友達が多い」というフレーズは彼女の願望かもしれない。

家族の話・仕事の話・友達のことなど何が事実なのではなく、そうありたい、そうであれば良かったという彼女の願いをそのまま受け入れられる存在になりたいと思う。

人生の最終章で「私の人生はこうだった」と思えるならば（例えそれが事実でなくても）そしてそれをそのまま共有してくれる存在に出会えるなら、それはそれで幸せな一生ではないか。

終わりよければ全て良しという言葉の通りに。